

23PO-am351

HIV 治療薬であるラルテグラビルの剤形変更が及ぼすアドヒアランスに対する影響

○東野 園恵¹, 百 賢二¹, 安 武夫¹, 黒田 誠一郎¹ (¹東大医科研病院薬)

【目的】2018年6月、HIV治療のキードラッグであるラルテグラビル(RAL)は、治療法の簡便化のため、400mg1日2回(1回1錠)製剤に加え、新たに600mg1日1回(1回2錠)製剤が販売された。本研究では、RAL切り替えとなった患者における、RAL服薬状況の評価を行ったので報告する。

【方法】対象は、東京大学医科学研究所附属病院においてRAL400mgから600mgへ切り替えとなった患者19名とした。服薬アドヒアランスは、100 mm Visual Analogue Scaleを用い、RAL切り替え前後1か月間の、服用順守状況および飲みやすさについての自己評価を、また服用誤りに関しては、直近3日間のHIV治療薬の服用錠数の記載に基づき評価した。

【結果】対象患者(52±12.9歳、男性/女性:19/0)における服用順守状況は、切り替え前後で差はなかったものの(96±3.6 vs. 100±0mm)、飲みやすさに関しては、19名中12名で低下が認められた(100±12.7 vs. 89±28.7mm)。一方、HIV治療薬の服用誤りは19名中3名であった。具体的には、RALの服用錠数を間違えた患者が1名、RAL以外の抗HIV薬を飲み間違えた患者が2名であった。切り替え後の有害事象に関しては、19名中9名で認められたものの、服薬継続が不可能となる例は無かった。

【考察】剤形切り替え前後において、自己評価による服薬順守状況に差はなかったものの、具体的な服用錠数の確認により服薬誤りを15.8%(3/19)で発見することができた。服薬遵守が治療に影響を及ぼすHIV治療薬においては、切り替え前後の服薬確認が重要であると考えられた。